

BOOK Review

外来・病棟・地域をつなぐ ケア移行実践ガイド



評者 角田 直枝 常磐大学看護学教授／元・茨城県立中央病院看護局長

入退院支援加算は、2022年度の診療報酬改定でも見直しがあった。この何年か、診療報酬改定のたびに、入退院に関連する診療報酬が変更・新設され、まさに病院と地域との連携へのニーズの高まりと変化の速さを感じる。そもそも退院調整加算として始まった時から、入院～退院までのプロセスにおける看護が変わってきた。そして、今や退院だけでなく、入院前から看護師がかかわるようになり、外来、病棟、そして地域へケアをつなぐのが当然のこととなった。

これらの診療報酬改定は、看護師のかかわり方のみならず、配属先や業務内容も大きく変えた。個別の患者の入退院支援にとどまらず、病院としての入退院に看護師がかかわるように変化し、看護師の役割発揮への期待が年々高まったと言える。実際、いくつもの病院で地域連携室や入院サポートセンターなどの名称による入退院支援を担う部署が立ち上げられ、そこに看護部長が配置されてきている。

ところで、看護職は診療の補助（医療）と療養上の世話（生活）の双方を支える専門職である。そのため医療関係者とも介護関係者とも共通語を持ち、調整を図ることができる。しかしながら、入退院支援に関連する部署の看護師たちは専門性や役割を認められた一方で、医師との新たな関係に戸惑うようになった。それは、入退院支援

に伴う連携先との調整や、そのための文書のやり取りに関して医師から疑問を投げ掛けられたり、意見が対立する場面に頻繁に遭遇したりするようになったからだ。

本書は、そうした疑問や意見にモデルを示すものである。看護師は、実際には診療情報提供書や訪問看護指示書を書くことはない。それなのに、文書の書き方について医師から質問されるという話を、入退院支援担当看護師たちから評者はよく聞いている。「先生、例えば、この本に書いてあるように……」とか、「この本に同じような症例が……」などと伝えると、医師とのやり取りを進めやすくなるのではないだろうか。こうしたやり取りが円滑になり、医師も看護師もその必要性を学んでいけるのが本書の意義ではないかと考える。評者は以前、救急外来受診後に帰宅する患者に対する支援の必要性について調査を行ったことがある。同調査で得られたエッセンスが、本書の「救急外来から始まる効果的なケア移行」の項においても取り上げられており、その内容に大変共感した。本書に基づいた取り組みが広まることを切に願う次第である。入退院支援を担当する看護職、特に看護管理者は、いざとなったときにさっと医師に見せることができるよう、デスクの上の一番目立つところに置いておくではないか。

小坂 鎮太郎、松村 真司 編

B5／184頁／2022年／定価3,850円（本体3,500円＋税10％）／ISBN978-4-260-04885-9／医学書院刊